

I. 背景

NICU へ入院した子ども（以下、NICU 児）の父親は、子どもの入院に伴う不安や仕事・家庭との両立に葛藤を抱えており、心理的支援が求められる。NICU の看護として、父親へ安心感を与える関わりや子どもとの関係形成を促す支援が報告されているが、支援を受ける父親がどのように捉えているのかについては十分に明らかにされていない。

II. 目的

NICU 児の父親が面会時に印象に残っている看護師の関わりを明らかにすることを目的とし、父親の認識に沿った看護支援を検討する一助とする。

III. 方法

1. **用語の操作的定義** 看護師の関わり：看護師と父親との直接的なやり取りに加え、父親が捉えた看護師と子どもや妻、および同僚の看護師とのやり取り。
2. **研究参加者** 出生体重 1,500g 未満、または在胎 35 週未満で出生し、既に退院した NICU 児の父親 6 名とした。なお、子どもの疾患や医療的ケアの有無は問わない。
3. **データ収集方法及び内容** 研究参加者は A 県内の NICU 児の家族会の協力を得た機縁法により募集した。2024 年 12 月から 2025 年 7 月に半構造化面接を対面またはオンラインで実施し、「面会時に印象に残っている看護師の関わり」を尋ねた。属性は事前に質問紙により把握した。
4. **分析方法** 録音データから逐語録を作成し、質的帰納的分析を行った。面会時の看護師との関わりやその捉え方について語られていた記述をコード化し、類似性に基づいてサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。カテゴリー化をする際は複数の研究者で検討した。
5. **倫理的配慮** 研究参加者には、研究の目的、自由意思による参加、個人情報保護等を書面で説明し、同意書への署名をもって同意を得た。研究者の所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施し、利益相反はない。

IV. 結果

1. **研究参加者の概要** 父親の年齢は 30 歳代が多く、子どもの在胎週数は 25～33 週で、出生体重は 1,000g 未満が多かった。父親 6 名のうち、3 名は双胎児の父親であった。
2. **NICU 児の父親が面会時に印象に残っている看護師の関わり** 分析の結果、80 コード、18 サブカテゴリー、7 カテゴリーを生成した（表 1）。研究参加者の父親は【子どもと暮らすために必要な準備をしてくれた】ことが印象に残り、沐浴やおむつ交換、授乳といった育児手技だけでなく、退院後に必要な内服や浣腸といった方法を教えてくれたことを語っていた。また、父親は方法の指導や実施のタイミングの調整、見守りを受ける中で安心感を得ていた。【子どもとスキンシップを取らせてくれた】ことにより、父親は子どもに触れることやカンガルーケアができないと思っていたが、看護師に促されて実際に触れ合う中で喜びを感じていた。【自分の思いに寄り添ってくれた】では、面会中に不安を抱える自分への言葉かけや明るい接し方から安心感を得て、励まされていた。【自分の思いを汲んでくれなかった】では、面会中に看護師の私的な話が聞こえ、NICU 内で何ができるのか説明も

なく、父親は看護師からほったらかされたように捉えていた。【自分が分からない子どもの様子を伝えてくれた】では、入院初日に面会できるまでの見通しや子どもの状態を聞き、入院中の子どもの様子を写真と共に記載したノートを見たり看護師からもらっていた。【自分の面会を調整してくれた】ことは、面会が制限される状況においても、時間やタイミングを調整することで面会できたことが印象に残っていた。【看護師たちは常に子どもに目を掛けてくれた】ことは、GCU に移動した後も NICU の看護師が子どもの退院を喜んでくれたことや、看護師の子どもとのやり取りから子どもそれぞれをかわいがってくれたように捉えていた。

表1 NICU児の父親が面会時に印象に残っている看護師の関わり

カテゴリー	サブカテゴリー
子どもと暮らすために必要な準備をしてくれた	退院後に必要な育児の体験をさせてくれた
	退院後に必要な子どもの健康を保つための方法を教えてくれた
	自分たちだけで暮らすための練習をさせてくれた
子どもとスキンシップを取らせてくれた	子どもに触らせてくれた
	カンガルーケアをさせてくれた
自分の思いに寄り添ってくれた	子どもの入院に伴う心の揺れに配慮してくれた
	前向きになれるような言葉をくれた
	相談したことに応じてもらえた
自分の思いを汲んでくれなかった	面会している自分をないがしろにした
	NICUのことが分からない自分をほったらかした
	説明についていけないのに一方的に話した
	病棟移動の連絡を自分にしてくれなかった
自分が分からない子どもの様子を伝えてくれた	子どもの状態を教えてくれた
	子どもの成長記録を作ってくれた
自分の面会を調整してくれた	母親だけでなく自分も面会できるようにしてくれた
看護師たちは常に子どもを目に掛けてくれた	普段から子どもをかわいがってくれた
	担当以外の看護師も子どもの退院を喜んでくれた
	入院している子どもそれぞれをみてくれていた

V. 考察

本研究で生成された7つのカテゴリーのうち、意味が相反する2つのカテゴリーに着目して考察する。

父親は【自分の思いに寄り添ってくれた】ことが印象に残っており、特に不安や心配といった心の揺れに対する配慮を受けたことを多く挙げていた。NICU児の父親は、子どもの入院に伴いネガティブな心理を抱くため（谷本，2019）、NICUの看護師は父親を安心させるための看護や、言葉を選んで気持ちをいたわる看護を実践していたことが明らかになっている（鶴，松浦，2017；谷本，2022）。これらのことから、【自分の思いに寄り添ってくれた】ことは、先行研究で明らかになっていた看護師の支援と一致していた。

その一方で【自分の思いを汲んでくれなかった】という看護師の関わりも父親の印象に残っていたことは、本研究における新たな知見である。オープンフロア型病棟というNICUの特徴から、面会中の父親には病棟内の様子や看護師の会話が聞こえている。そのため、父親は病棟内の看護師の様子を敏感に察知していることを、NICUの看護師は改めて認識する必要がある。さらに、NICUという環境に慣れていない父親は、自分に何ができるのか分からず困惑する可能性がある。そのため、父親ができることを選択肢を伝え、子どもとの過ごし方を相談したうえで、環境を整える必要があると考える。

本研究に参加した父親は、NICUの看護師が面会中に【自分の思いに寄り添ってくれた】という印象をもつ一方で、【自分の思いを汲んでくれなかった】という印象も抱いていた。NICUの看護師には、先行研究で明らかになっているような父親との直接的な関わりに加えて、父親が安心して面会でき、子どもとの面会に満足感を得られるような環境を整えることが求められる。このような満足感を得ることで父親の面会に対する意欲が向上し、その結果、面会頻度が増え、子どもとの関係性の構築にもつながると推察される。